

令和 2 年 7 月 11 日現在

機関番号：20105

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K09205

研究課題名（和文）後期高齢者の女性の尿失禁リスク要因解明と対処行動促進に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Risk Factors and Coping Behaviors of Urinary Incontinence in Late Elderly Women

研究代表者

原井 美佳（HARAI, MIKA）

札幌市立大学・看護学部・講師

研究者番号：80468107

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、A市における75歳から90歳未満の女性の尿失禁の有訴率とリスク要因を明らかにし、セルフケアとサポートについて検討することである。2017年～2019年に郵送法による自記式質問紙調査を実施した。本研究における「尿失禁あり」の定義は、症状とQOLを兼ねた質問票のICIQ-SFの「尿失禁頻度なし」以外の回答とした。

調査の結果、2017年の尿失禁の有訴率は45.6%、2018年は54.8%、2019年は47.8%であり、2人に1人が尿失禁を自覚していることが明らかになった。ICIQ-SFは、2017年は $3.4 \pm 4.1$ 、2018年は $7.55 \pm 4.2$ 、2019年は $6.3 \pm 4.7$ であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対象者の尿失禁の有訴率の3年間の平均は49.4%であり、地域に在住する後期高齢者の女性の約半数が尿失禁を自覚していた。また、介護認定レベルとICIQ-SFに有意差がみられたことから、尿失禁は生活の質に大きく影響する症候であることが明らかになった。しかし、介護認定レベルが高くても必ずしもICIQ-SFが高いとは限らず、対象者個々の身体状況に応じた状態に応じた支援が必要である。1年前と比較して尿失禁の状態の変化を自覚していた人は、尿失禁により毎日の生活が損なわれている程度が大きいと回答していた。後期高齢者の女性における1年間の加齢変化を予測し、健康長寿のためのタイムリーな支援が重要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the prevalence rate and risk factors for urinary incontinence among women aged 75 to under 90 in City A, and to investigate self-care and support. A survey using a self-administered questionnaire by mail method was conducted from 2017 to 2019.

We used ICIQ-SF (International Consultation on Incontinence-Questionnaire).

The prevalence rate of urinary incontinence in 2017 was 45.6%, 54.8% in 2018, and 47.8% in 2019.

ICIQ-SF was  $3.4 \pm 4.1$  in 2017,  $7.55 \pm 4.2$  in 2018, and  $6.3 \pm 4.7$  in 2019.

研究分野：尿失禁ケア、老年看護学、認知症ケア

キーワード：尿失禁 後期高齢者の女性 ICIQ-SF

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

わが国の平均寿命は、男性 80.5 歳、女性 86.8 歳、高齢化率は 26.7%となり、2055 年には 39.4%に達すると予測されている(内閣府、2015)。このような超高齢社会において、長い老年期の生活の質(Quality of life、以下 QOL)を保つことは重要な課題である。これまで、高齢になるほど排尿関連症状が増加すること等、尿失禁の増加と関連要因が報告されている。尿失禁は、排尿障害の中でも QOL に大きく関与する疾患とされ、いかに尿失禁を一症候とする老年症候群とそれに続く要介護状態への連鎖を防ぐことができるかは、老年期の QOL を維持する上で重要である。特に、後期高齢者の年代は、様々な症候を容易に引き起こし、先行研究から尿失禁の有訴率の高さが推測される。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、以上のような背景をふまえて、寒冷地である A 市に居住する 75 歳以上 90 歳未満の女性の尿失禁の有訴率と尿失禁のリスク要因を明らかにし、セルフケアと支援について検討することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究期間及び調査期間

本研究の研究期間は、2017 年 4 月～2020 年 3 月であった。調査期間は、所属大学の倫理審査承認後の 2017 年～2019 年の各年の 7 月～8 月として実施した。

#### (2) 用語の定義

本研究における「尿失禁あり」の定義は、症状と QOL を兼ねた質問票の ICIQ-SF (International Consultation on Incontinence - Questionnaire) (Gotoh M,etal,2009) の尿失禁頻度「なし」以外の回答とした。

#### (3) 郵送による質問紙調査

本研究は、後期高齢者の女性を対象に、郵送法による自記式質問紙を用いた 3 年間の縦断研究として実施した。A 市内に居住する 75 歳以上 90 歳未満の女性のうち 400 人(約 0.0033%)を無作為に抽出した。研究依頼書により、平成 2017 年度調査への同意が得られた対象者に、2018 年度、2019 年度の縦断調査への協力を依頼し同意書を取得した。対象者は後期高齢者であることから、認知力、視力等の不自由さによって、本研究の質問紙に回答することが困難な人が含まれることが想定されることから、質問紙の内容、文字の大きさ等、負担の少ないものとした。

調査項目は、基本属性、ICIQ-Short Form(スコア化 ICIQ-SF)日本語版、介護認定の状況、排便、既往歴、家系的要因、生活習慣等から構成した。

### 4. 研究成果

#### (1) 2017 年度調査

2017 年 7 月～8 月に質問紙調査を実施した。対象者 400 人のうち 103 人から回答があった(有効回答率 25.8%)。回答者の平均年齢は  $81.0 \pm 4.1$  (歳)、尿失禁の有訴率は 45.6%であった。特に、75 歳以上 80.5 歳以下の尿失禁の有訴率は 36.0%であるのに対して、80.6 歳以上 89.0 歳以下は 67.1%であり、後期高齢者の中でも加齢に伴う尿失禁の有訴率の割合は高かった。ICIQ-SF の平均値は  $3.4 \pm 4.1$  であった。

#### (2) 2018 年度調査

2018 年 7 月～8 月に質問紙調査を実施した。2017 年度調査の協力者 103 人のうち 84 人から回答があった。平均年齢は  $81.8 \pm 3.9$  (歳)、自己申告による尿失禁有訴率は 54.8% (46 人)、ICIQ-SF の平均値は  $7.55 \pm 4.2$  であった。そのうち 1 年前と比較して尿失禁の状態に変化ありの人(10 人)の ICIQ-SF は  $10.8 \pm 5.4$  であり、変化なしの人(30 人)の  $6.23 \pm 3.7$  より有意に高い得点であった( $p=0.014$ )。このように対象者の 54.8%が尿失禁ありと回答し、地域に居住する後期高齢者の女性の半数以上に尿失禁がみられた。さらに 1 年前と比較して尿失禁の状態の変化を自覚していた人は、尿失禁により毎日の生活がそこなわれている程度が大きいと回答していた。以上より後期高齢者の女性における 1 年間の経年的な加齢変化を予測し、その健康長寿のためのタイムリーな排尿ケアが重要と考えられた。また、対象者のうち、介護認定を受け入れている人は 26 人(31.0%)おり、そのうち要支援 1 は 7 人(8.3%)、要支援 2 は 5 人(6.0%)、要介護 1 は 4 人(4.8%)、要介護 2 は 5 人(6.0%)、要介護 3 は 1 人(1.2%)、要介護 4 は 3 人(3.6%)

要介護5は1人(1.2%)であった。認定なしの人の ICIQ-SF は  $3.3 \pm 3.9$ 、要支援1の人は  $4.9 \pm 4.9$ 、要支援2の人は  $7.2 \pm 5.7$ 、要介護1の人は  $3.0 \pm 3.6$ 、要介護2の人は  $6.4 \pm 5.9$ 、要介護4の人は  $12.3 \pm 10.81$  であり、介護認定レベルと ICIQ-SF に有意差がみられた ( $p=0.038$ )。尿失禁の量は、少量33人(39.3%)、中等量11人(13.1%)、多量2人(2.4%)であった。尿失禁のタイミングは、トイレにたどり着く前28人(33.3%)、咳やくしゃみをしたとき20人(23.8%)、眠っている間6人(7.1%)、身体を動かしている時3人(3.6%)、排尿を終えて服を着た時2人(2.4%)、理由がわかたずにもれ4人(4.8%)、常にもれている1人(1.2%)であった。現病歴との関連では、喘息の既往がある人の ICIQ-SF は  $7.29 \pm 4.5$  であり、ない人  $3.95 \pm 4.7$  より有意に高かった ( $p=0.044$ )。

### (3) 2019年度調査

2019年7月～8月に質問紙調査を実施した。2018年度調査の協力者84人のうち67人から回答があった。平均年齢は  $82.8 \pm 3.9$  (歳)、自己申告による尿失禁の有訴率は47.8%(32人)、ICIQ-SFの得点の平均値±標準偏差は  $6.3 \pm 4.7$  であった。このうち1年前と比較して尿失禁の状態に変化があった人(6人)の ICIQ-SF は  $10.0 \pm 1.6$ 、変化があったかわからない人(3人)は  $8.3 \pm 2.5$ 、変化なしの人(19人)は  $6.5 \pm 4.3$  であった。これらの回答に有意差はなかった ( $p=0.199$ ) が、この得点から、1年前と比較して尿失禁の状態に変化があった人の尿失禁に関するQOLは、低い傾向を示しており、尿失禁によってその生活が損なわれている感覚の高まりが推察された。以上のことから、尿失禁によって生活のどのような側面が損なわれて不自由さが増しているのかについて把握し、この年代における活動性の低下とそれによる自立度の低下を招かないような支援が必要と考えられた。

以上のとおり、対象者の尿失禁の有訴率の3年間の平均は49.4%であり、地域に在住する後期高齢者の女性の約半数が尿失禁を自覚していた。また、介護認定レベルと ICIQ-SF に有意差がみられたことから、尿失禁は生活の質に大きく影響する症候であることが明らかになった。しかし、介護認定レベルが高くても必ずしも ICIQ-SF が高いとは限らず、対象者個々の身体状況に応じた状態に応じた支援が必要である。1年前と比較して尿失禁の状態の変化を自覚していた人は、尿失禁により毎日の生活が損なわれている程度が大きいと回答していた。後期高齢者の女性における1年間の加齢変化を予測し、健康長寿のためのタイムリーな支援が重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 HARAI MIKA, MORI MITSURU
2. 発表標題 Investigation of urinary incontinence in Japanese elderly women 75 to 90 years old.
3. 学会等名 ICS2018 (USA, フィラデルフィア) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原井美佳、森 満
2. 発表標題 地域に居住する後期高齢者の女性の尿失禁の有訴率および生活への影響の程度についての検討
3. 学会等名 第32回日本老年泌尿器科学会 (旭川市)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HARAI MIKA, MORI MITSURU
2. 発表標題 Relationship between urinary incontinence and level of certification of long-term care needs of community-dwelling latter-stage elderly women in Northern Japan
3. 学会等名 ICS2019 (スウェーデン, ヨーテボリ) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 満  (MORI MITSURU)  (50175634)	札幌医科大学・医学部・名誉教授    (20101)	